

マクロプルーンスと中央銀行 —金融リスク管理の実務の視点から—

日本総合研究所 西口健二

金融危機の前後から、金融システム全体の中を連鎖しながら瞬く間に伝播する「マクロリスク」とでもいえるような、新型のリスクが急拡大してきている。これは、伝統的な商業銀行業務と市場型金融業務が実体経済と相互作用をして大きくなるものであり、これまでのリスク管理や金融規制を強化するだけでは防ぎ得ない。このような基本認識の下で、本報告では、「今、なぜマクロプルーデンスか」について、金融リスク管理の実務の視点から論じることを目的とする。

このところ「危機」という言葉が日常になるほど、世界中で様々な事が起こっている。本報告では、こういった個々の事態を踏まえながらも、場当たりの対応や、後追いの対応になってしまわないよう、普遍性のあることだけをできるだけ抽出し、今後の議論に活かせるような内容とする。

まず基本的な問題意識として、金融危機やそれに続く欧州債務問題において、金融機関のリスク管理は機能したか、ということがある。リーマンショック後、100年に1回という金融危機になり、経済は大変混乱したわけだが、そこで、たとえば、“欧米式”のリスク管理は正しかったか、金融理論や計量化は無効だったのではないか。金融危機のあと、欧米で金融規制案が数多く叫ばれたが、それでだれも問題が解決したとは考えていない。さらにひどいことには、金融全般に将来像が見出せずに沈滞したままであり、そこに次の欧州債務危機が見え隠れする。

要は、金融のあり方自体がそもそも問われており、金融機関は、デフレが進行するなか、経済に必要な資金循環機能を果たせているか、さらには、金融と財政が世界規模で共振し脆弱な体質となっていないか、といったことが、世界的に問題になっているわけだ。

そこで、個々の金融機関の経営の問題に加えて、金融システム全般のどこに問題点があり、逆に、どこまでが今なお有効かを見極めることが重要であり、その上で、対応策を講じる時ではないか、というのが本報告の出発点となる問題認識だ。

本報告では、新たなリスクである「マクロリスク」に関するいくつかの実証研究結果を紹介することから始める。その上で、これまでのリスク管理の限界を論じて、今、再構築が求められるストレステストやリスク資本管理について提案する。また、バーゼルⅢや資本サーチャージ規制とこの「マクロリスク」の関係を整理し、金融規制強化の意義と課題を分析する。最終的に、今後の金融機関経営と金融政策・金融規制の方向性を論じて、金融システムの安定のために求められる「マクロプルーデンス」のあり方について実務面から論考していきたい。